

## — 臨床 —

## 口唇口蓋裂外科的矯正—治療例 20 年後の検証

両川弘道

りょうかわ矯正歯科

**A case Report of Lateral Cleft Lip and Palate Patient at 20years After Treatment**

Hiromichi Ryoukawa

*RYOUKAWA orthodontic office*

平成 22 年 4 月 15 日受付 5 月 18 日受理

**Key words :** 口唇口蓋裂 (Cleft Lip and Palate), 外科的矯正法 (Osteotomy), 側方拡大 (Lateral Expansion), 犬歯ガイド (Cuspid Guidance), 楔状欠損 (Cuneiform Defect).

**Abstract :** The Patient was a female with lateral cleft lip and palate showing mandibular protrusion due to severe maxillary collapse.

She was treated with lateral expansion in pubertal stage.

After growth spurt period, surgical orthodontic treatment was given with Le Fort type I Osteotomy in Upper jaw and Obwegeser's Osteotomy in Lower jaw.

20years after Treatment, Patient had some periodontal problem.

Cuneiform Defect appeared lateral segment teeth in the Upper Jaw.

## 抄録

片側性唇顎口蓋裂症例を外科的矯正にて咬合再建した患者の 20 年後を検証した。

セファロ上では下顎の時計回り方向の回転が認められたが、他に特記すべき変化はなかった。上顎の狭窄も認められなかったが、上顎の全歯牙に歯根露出および楔状欠損が認められ補綴物の咬合関係に問題のあることが示唆された。

## 【緒 言】

口唇口蓋裂患者は、誕生から成人に至るまで続く口腔機能再建という一連の治療の流れの中で、矯正歯科医は治療の立案から完成まで深く関わるが、患者が成人し補綴処置が終了した地点で治療終了と考えていた。この度口唇口蓋裂症例の咬合再建に上下顎離断手術を行いその後恒久的な上顎の狭窄防止を目的とした補綴処置を施した症例の 20 年後を検証し、矯正医が、患者の生涯を通しての歯科的ケアにまで考えがおよんでなかったことを反省する機会を得たので報告する。

## 【症 例】

患者：初診時 11 才 1 ヶ月 女子

既往歴

生後 2 ヶ月で口唇閉鎖手術

1 才で口蓋裂閉鎖手術

破裂部への骨移植手術および 2 次修正手術は受けていない。

顔貌所見

口唇裂の手術跡があり上口唇は非対称、下口唇は顰転、中顔面は陥凹し反対咬合の様相を呈している。

口腔内所見

上顎は狭窄し、前臼歯部ともに cross bite を呈している。上顎側切歯は左右とも下顎左側中切歯は先天性欠如、下顎前歯部は舌側に傾斜し、破裂部位に接した